

ストライク・ザ・ブ
ラッド the Garden of
sinners

蒼穹の命(ミコト)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

災厄をもたらすという、伝説の中の存在であった第四真祖。そして、世界の境界を超えた少年が織り成す、人と魔が入り混じる常夏の人工島で物語が始まる。

12 / 7 活動報告追加しました。

目次

キャラクター・マテリアル	1
プロローグ①	5
プロローグ②	10
いつも通りの日常	21
穏やかなひと時	29
最後の日常	38
遭遇	44
真祖と剣巫と殺■鬼	52

キヤラクターマテリアル

・南宮織（みなみや しき）

性別・男

年齢・六歳（来訪時） ↓十五歳（原作開始時）

身長・169cm

体重・56kg

趣味・読書、昼寝、料理、鍛錬、散歩、野菜栽培、音楽鑑賞、刃物と骨董品収集

好きな物・空、茶類、温泉

一人称・俺

通り名 死神織 ↓ ???

モデル 空の境界 両儀式、月姫 遠野志貴

直死の魔眼を持つ彩海学園中等部三年生の攻魔師見習いの少年。 とある夜の草原

で倒れていた所を仕事帰りの南宮那月に拾われて、その後は南宮の姓を貰い、絃神島で暮らしている。

本来の名前は ???? 織。先祖代々続いている武芸を習っている普通の一般人であったが、

生まれつき身体が弱かった為、人生の大半はベッドの上で闘病生活を送っていたが、その奮闘は報われず息を引き取った。魂だけとなった織は根源へと辿り着き、自身が消されるのを拒絶し抗った結果「」と繋がってしまう。その為、消滅は何か免れたが織として生きていた記憶は殆どなくなってしまう。その後には根源を用いて新しい肉体を構成させ、境界を超えて別世界へと落ちた。

根源から構成された肉体は常人よりも頑丈にはできているが、ベースはあくまで人間であるため、人の範疇からは一応外れてはいないが、染み付いた武術の動きと、こちら側に来てからも鍛えているため魔族相手でも遅れは取らない。

事情を知っているのは那月やナナキなど、ごく少数の者たちのみ。

容姿は黒い髪と目で、中性的な顔だちをしている。

履物は下駄ブーツ、学校用の靴。学園用の制服以外着ているのは着物に赤い革ジャンを羽織っている。歩けば度々注目されそうな和洋折衷なスタイル。着物を着ているのは織の名残であり、赤い革ジャンとはある少女からの贈り物。プレゼントされてからは毎日羽織っている。

スキル

根源接続

前述してある通り。構成してからは魂と肉体両方に繋がっている。

直死の魔眼

「」に触れて繋がった為開眼。あらゆるモノの死を捉え、理解し、殺すことが可能。「」に触れて繋がってしまった影響で霊体や能力を視て殺すのに長けているが、生前病弱体質だったが故に何度か臨死体験を経験してたのもあり、生物の死も視えやすくなっている。

発動時は青緑色に輝き、死の「線」と「点」は白く視える。

現在は己の意思でオンオフの切り替えはできるので負担は余りないが、目覚めた当初はうまく制御できなかったので那月の知り合いが作った魔眼殺しの眼鏡を付けていた時期があった。

いまでも魔眼殺しのレンズ入りの眼鏡はもしものために残している。

空間魔術

空隙の魔女という通り名を持つ国家攻魔官で義理の姉の南宮那月から教わった。主に空間転移と鎖の召喚を用いている。

・ ナナキ

性別・雄

年齢・？

趣味・昼寝、猫達と遊ぶこと

好きな物・織のご飯、猫

一人称 ・ オイラ

モデル F F 7 の レッド VII

織が契約している使い魔。織が十歳の時に出会った。その後使い魔契約をし、それ以来は学園の裏手の朽ち果てた修道院で猫達と共に暮らしている。普段は攻魔師見習いの織の仕の手伝いをしているがある出来事で重傷を負ってしまい、治す為に療養していた。現在は普通に動ける様になっているがまだ戦闘出来る程には回復はしていない。

プロローグ①

物語を始める前に、まずは1人の少年の話をしよう。

その少年は恵まれていた。

生まれついでての天賦の才。

先祖代々続けていた剣の道、勉学等に励み、沢山の友人がいた。

だが1つだけ恵まれなかった。

少年は生まれつき、体が弱かった。

原因不明の病を患い、長い時をベッドの上で病と闘いながら過ごし、静かに息を引き取った。

死んだ少年の魂は辿り着いた。

全てがあるのに何も無い。生と死の境界。

全ての始まりであるがゆえに、その結果で世界の全てを導き出せるもの。最初にして最後に記したもの。

この一端の機能を指してアカシックレコードとも呼ばれている。

それは少年の知識を、記憶を、生きて来た軌跡を記録し、少年の魂から「少年」とい

う余分な存在を消去しようとした。

名前が、友人の顔が、両親の顔が、少年の記憶が消されていく。

だが少年は抗った。

抗ってしまった。

これ以上失いたくないと。

自身の記憶を、思いを、これまでの全てを奪うな!!と。

自分は、自分のままでいたい!!と。

その結果、少年は多くのものと引き換えに「 」と繋がり、消滅を免れた。

だが少年は境界からは出られなかった。

何故なら、少年は死んでいるため肉体がない。

魂だけでは境界から出る事は無理だった。

だから創った。自らの肉体を。

「 」と繋がった少年は膨大な知識と、根源という素材から新き^{肉体}自分を創りあげた。

そして、少年は境界を越えた。

生まれて、生きて、死んだ、自身の世界とは別の次元へと落ちていった。

落ちた先はどこかの草原だった。

辺りには人も建物もなく、ただ草が広がっていた。

まずは誰かを、何かを探そう。

自分は世界の理に逆らってまで生きたいと願い、叶えてしまったのだから。

だからまず、歩くことから始めよう。

少年は立ち上がり、一歩ずつ歩き始めた。

歩いて、歩いて、歩いて、歩いて。

沢山歩いた。

それでも誰もいない、何も無い。

変わらない景色を見て、少年の心は折れ始めた。

痛くて、苦しくて、悲しくて、寂しくて。

沢山の負の感情に押し潰されて、少年は地面に倒れ込んだ。

自分以外誰もいない、綺麗なお月様が照らしている、草むらの海の中で溶けて消えて

しまいそうだった。

けれど、そんな時。

「こんな所で何をやっている」

と、後ろから、女の人の声が聞こえた。

少年は女の人が言っている意味がよく分からなかった。

「ただでさえ、そんな小さいなりをしているんだ。こんな所で倒れていたら見えなくな

るのが分からないのか？ 危うく邪魔だから吹っ飛ばす所だったぞ」と言われた。

……………少しカチンと、頭にきた。

立ち上がった少年は声がした方向に向いた。

そこには、お月様を背に、黒い日傘と服を着た少女がいた。

それを見た少年は、君だって小さいじゃないかと言った。

その瞬間、少女が持っていた扇で叩かれ、そのまま正座させられて、クドクドと説教された。

足が痺れてきた頃に漸く終わり、改めて少女に問われた。「こんな所で何をしていた」と。

少年は全て話した。

まるで熱にうかれたかのように、一から全部包み隠さず。

この世界に落ちてから、初めて会った人だったからかもしれない。

それを聞いて、少女はしばらく黙り込んだ後、口を開けて「お前は どうしたい」と聞かれた。

1人になりたくない、何も無い所にいたくない。

ここではない何処かに行きたいと言った。

「ならば、私の所に来い」と手を差し伸べられた。

少年は迷わず、少女の手をとった。

少年は少女と共に草原を、海を、空を越え、人の手によって造られた、人と魔に属するもの達がいる常夏の島に行った。

その後少年は、少女から姓を与えられ、この世界の人間として生きて行くことになった。

みなみやしき
南宮織と言う一人の人間として——

プロローグ②

いとがみ
絃神島。

南方300km離れた太平洋上に浮かぶ、鉄と魔術によって作られた ギガフロート 人工島。行政区分は東京都絃神市で、人工島管理公社の手によって統治されている独立行政区である。

別名「魔族特区」と呼ばれており、絶滅に瀕した魔族を保護するとともに、彼らの研究を行っている。

だが、それと同時に魔族達による犯罪も少なからず発生していた。

時刻は深夜零時。多くの人々は眠りにつき、月や星々の輝きが照らす夜の中を、1人の男が駆け抜けていた。

その男はとある過激派グループに所属しているテロリストで、近々この島で行われる計画の前準備の為に先発隊として、多くの仲間と共に訪れて潜伏していたが、巧妙に隠

して、いた潜伏場所が特區警備隊に発見され、彼等と協力していた国家攻魔官のアイランド・ガード空隙の魔女によって致命的な打撃を受けてしまった。

現在はバラバラに散りながら逃げている仲間たちと合流する為に、事前に決めていた合流ポイントに向かっていた。

そこに着けば後は島の裏手にある脱出艇までそう遠くはない。僅かな希望を頼りに男は路地裏を走っていたが、それは

暗闇の中から吹っ飛んできた仲間によって打ち碎かれることになる。

男は飛んできた仲間に駆け寄る。

「おい、どうした!? ここで一体何があった!?!」

「既に……の場所は……バレて……いた。他……者は……魔女の……にやられ……お

前は……早く……逃げ……」

途切れ途切れに男へ忠告しながら仲間は意識を墮とした。そして……

カラン コロン カラン コロン

とこちらに向かつてくる足音が辺りに響くように聞こえてきた。

男は咄嗟に身構えて、いつでもこの場から離脱できるようにする。

乾いた木が地面を軽く叩いている様な足音が近づいてくるにつれて、冷や汗がダラダラと大量に流れていく。

だが、暗闇の中から現れたのはアイランドガードでも空隙の魔女でもなかった。

出てきた人間は魔女よりも背丈は高いがアイランドガード達よりは低い。

顔立ちは男性なのか女性なのか判別し難い中性的な雰囲気を纏い、短くとのつた黒い髪に夜の帳の様な眼差しをしている。

右手には刃渡り6寸もののナイフを持ち、服装は藍色の着物に赤い革のジャンパー。そして履き物は下駄という街中を歩けば瞬く間に注目されてしまいそうな和洋折衷のスタイルをしていた。

「何だ、まだ残ってる奴がいたのか。 てつきり今ので最後かと思ったんだが……まあいいか」

そう呟きながら人間が近づいてくる。

理由は分からないが、男だろうが女だろうが関係なくこの人間は危険だと男の本能が警告してきた。ならば早くこの場を切り抜けて自分だけでもこの先にある脱出艇に……

「一応言つとくが、この先にあるあんた達が用意した脱出艇は使えないぜ。 ここにくる前にエンジンを「殺して」動かないようにしたからな。 本当はバラバラに解体しようかと思つてたんだが、それだと海に沈んで沿岸警備隊コーストガードの連中に手をわずらわせちゃうからやめておいた」

「なっ!?」

人間はあつさりと男の希望を言葉で両断した。

このままだと不味いと感じた男は持つていたスモークグレネードを投げつけ、その場から離脱した。

「ゲホッゲホッ……ちっ」

この程度の煙幕なら自分の眼で男を捕捉して捕まえるのは容易いと踏んでいたが、運悪く煙を吸ってしまい咳き込んでいるうちに男に離脱されてしまった。

「くっそ……油断した、まさか煙吸っちゃうなんて。こんな所、那月義姉に見られてたら一晩ベランダ干しの刑確定だぞ……」

とはいえ、この程度ならまだ男を確保できる。

「絶対に逃がすかよ……」

少年——南宮織は逃げた男を追跡する。

男が逃げた先は、ビルを建設している工事現場だった。

うまく撒いたと思つた男は息を整えて、これからどうするかと思案しようとしたがそれは叶わなかった。何故なら……

視界に、撒いたと思つていた織を見てしまったから。

そして、織の口がゆっくりと開いた。

見 っ け た ぜ

背筋に寒気が走る。

男はビルの壁際にある、作業する際に造られた仮設の足場へと向かい、同じく造られた階段を登つてビルの上へ向かう。

後が続いて織も足場へ向かい、上へ逃げた男を追う。

カン！ カン！ カン！ カン！ と鋼鉄を蹴る様に走る足音が耳に入る。

このままでは追いつかれる。男は近くに放置してあつた資材を階段に放り込んで追つて来る織を妨害する。

ガラン！ ガラン！ ガラン！

跳ねる様子上から資材の大群が落ちてくる。織は左側にかかつていたブルーシートをナイフで切り裂き、外へ飛んだ。

曲がることが出来ない資材は地上へと落下していく。それに対して自ら飛んだ織は魔法陣を展開し、飛び出てきた鎖を、足場を支えている鉄棒に絡みつかせて固定すると、ナイフを持っていない左手で鎖を掴んで落下を免れる。地面に墜落した資材を尻目に、ブランコの要領で体を前後に動かし、その勢いを利用して再び飛んで足場に着地する。

体勢を立て直した織は上へ逃げた男を追う。

鉄骨やらクレーンやら色々と鎮座している工事現場が男が辿り着いた終点だった。

あれから一体どれくらい走ったのだろうか。もはや時間の感覚が麻痺してしまつてよく分からない。思わず後ろを振り返って見ると追いかけてきた人間はおらず、辺りには暗闇しか広がっていないかった。

もしかしたら先程の資材のなだれに巻き込まれて落ちていったのではないかと予想したが、

「遅かったな。鬼ごっこはもうお開きか？」

又もや希望は打ち砕かれた。

声が出た方向を見ると、クレーンが吊るしている鉄骨の上に、月の光を浴びながら座る織がいた。

「貴様いつからここに!?？」

「あんたがここに着く前から。登るのがめんどくさくなつたから空間転移で一氣にここまで来たんだよ」

そう言つて織は立ち上がり、鉄骨の上から飛び降りて地面に着地した。

「なああんた、ここで大人しくお縄についてくれないか？」

もう零時過ぎちまつたし、眠くてたまらないんだ」

眠たそうな顔をしながら織は言い、それを聞いた男は

「悪いが、俺はまだここで捕まるわけにはいかない」

先程からずっと続いている本能の警告は全く止まらない……だが、それがどうした！路頭に迷つていた自分を受け入れてくれたあの方から頼まれた仕事を投げ出せる訳がない！ 逃げるのはやめた。相手が何処の誰であろうと関係ない。男がそう決意した瞬間、彼の体が上半身の服を破りながら風船のように膨れ上がり、全身が毛で覆われ爪が鋭くなり、顔つきは最早人ではなく野生の獣のようになった。

人間から獣人へと変化する特殊能力と、それに伴う高い身体能力・再生能力を持つ種族——獣人。正に目の前にいる男がそうだった。

変身した男が構えをとった瞬間、ぼけぼけしていた織の意識は覚醒する。例えるなら、オフになっていたスイッチが瞬時にオンへと切り替わったかのように。

「そう……なくつちやなあ！」

織もナイフを構える。

いつの間にか月は雲に覆われており、2人の周囲は静寂につつまれた暗闇と化していた。

お互い構えてから数分。覆っていた雲が移動し月が顔を出して暗闇を照らした瞬間

2人は同時に動き出し、ナイフと爪を振るった。

まるで踊っているかの様に火花を散らしながら曲線を描くナイフと爪。男が爪を振り上げれば、織はナイフで受け流してそのままカウンターの一闪を放ち、男のもう片方の爪が一闪を止める。

月光を帯びた異なる銀色の軌跡が幾度となく放たれ、受け流され、返され、止められる。殆どがその繰り返しであった。両者互角の様に見えるが、実際は男が押されていた。

男はさまざまな方向から攻撃しているが、織は最初の踏み込み以降その場から離れる事なく、左足を軸にして体を動かしながら男の攻撃を受け流して反撃をしていた。

「くっ……」

男は無理やり織のナイフを弾き、距離をとつてもう一度織にむかつてグレネードを投げつける。一つ違うのは投げたのは煙幕では無く爆発する物だという事。だが……

「同じネタは笑いも戦いでもそう何度も通用しねえぞ」

織は閉じていた眼のスイッチを入れた。織の瞳は青緑に輝き、彼の眼に映る世界は自身を中心に白い「線」と「点」で埋め尽くされていく。それは男が投げたグレネードも例外では無い。

投げられたグレネードはスローモーションのように遅く、「点」を視るのは容易い事だった。

織は持つていたナイフを躊躇いなく投擲する。その切っ先は見事にグレネードの「点」を穿ち、そのままナイフと共に飛んで、爆発する事なく鉄骨の柱に突き刺さる。飛翔したナイフに穿たれたグレネードはサラサラと風に飛ばされる砂のように消えて無くなった。残ったのは鉄骨に突き刺さっているナイフだけだった。

その光景に男は唾然とし、その一瞬の隙が勝敗を決した。

織は至近距離まで一気に近づくと、掌底で男の顎を打ち据えて脳を揺らし、そのまま回し蹴りを放つて男を吹っ飛ばした。

織に蹴り飛ばされ、宙を飛んでいる男はある話を思い出した。

死神織。

空隙の魔女が拾った出自不明、記憶喪失の浮浪児。現在は南宮の姓を名乗り、この島に住んでいる少年。彼の黒き瞳が青緑色に光り輝けば、それは終わりが迫っている予兆だと。そして、相手が不死身の吸血鬼だろうと何だろうと生きているなら一振りのナイフであらゆるモノを死へ至らめるとの事。

男は漸く本能が発していた警告を理解した。

この少年は不味いどころではなく、出会ってはいけないモノだと。

そんな事を脳裏に浮かべながら飛んでいた男は、鉄骨の柱に激しい音を立てて激突した。男は白目を剥きながら意識を失い、人間の姿に戻った。

織は男に近づき意識を失っているのを確認すると、革ジャンのポケットからスマホを取り出してある人物に連絡を入れる。

『私だ』

「今逃げてた連中の最後の一人を確保した。俺が合流ポイントでやった構成員と脱出艇はどうしたんだ？」

『お前が捕らえた奴以外は全員連行したよ。脱出艇は今奴らの手がかりがないか調査中

だ』

「……………」

『どうした織？』

「……つと悪い那月義姉。ちよつと月を見てぼーつとしてた」

『月？』

「ああ、あの草原で那月義姉と出会った時もこんな月だったなあって思ってた」

『あの日からもう9年か……………』

途端に会話が途切れた。もしかしたら向こうも自分と同じ様に月を眺めているのか
と思い、少し静かに待った。暫くして今度は向こうから話しかけてきた。

『これ以上起きてたら明日に支障がでる。さっさとそいつをアイランドガードに引き渡
して帰るぞ、織』

「りょーかい。すぐに行く」

織は通話を切つて気絶した男を担ぎ、鉄骨に刺さったナイフを回収した。

この場から離れる前に、織は魔眼を開きながらも一度空を見上げた。

地上はこんなにも死が満ちているのに雲ひとつない星空と月は、この世界に落ちてか
らもずっと、あいも変わらず輝き続けているなと思いつながら織は眼を閉じて、暗闇の中
へと戻って行った。

いつも通りの日常

アイランド・ウエスト
人工島西地区高級マンション最上階の一室で織は目を覚ました。

時刻は午前5時前。昨夜の一件のせいで余り眠れてない織は二度寝をしようとしたが何とか眠気を抑え込んで布団から出る。寝間着を脱いで鍛錬用の道着に着替えを済ませた後、自分の部屋を見渡した。

織の部屋は洋室ではなく完全な和室。ここに来たばかりの頃はまだ洋室だったが、此処での生活に慣れ始めた頃に和室に改装して欲しいと義姉に頼んだのがキツカケだった。だがその要望に義姉は反対しこっちも譲れないと諦めずに説得したが、しまいには得物を持ち出すほどの事態に成りかけていた。思えばあれが南宮家初の義姉弟喧嘩だったな。と織は思い返していた。

何でわざわざ部屋を和室にしたのかは、何と言うかこの世界に落ちて南宮織になる前の????織だった頃の名残というか、自身に遺されている数少ない前の世界では当たり前だったモノと言うべきか。学校以外では着物を着て過ごしているのも織に遺された数少ない習慣の1つでもある。ただし、着物の上に赤い革ジャンを羽織る習慣はこの世界で身についたモノだ。数年前にとある少女から貰った贈り物で………思い

返すと長くなる上にメンドくさいのでやめておく。

自分の部屋を後にし、洗面所で顔を洗い流してからベランダにて自身の数少ない趣味で栽培しているミニトマトやナスといった夏野菜たちに、ジョウロで水をあげる。こうしているとき、織が子供だった時を思い出す。病を治すために空気の良い田舎に住んでいた、剣の師であり他にも様々な事を教えてくれた祖父母と暮らしていた日々を。祖母が育てていた野菜を籠に入れて近辺にある川で冷やしたり、祖父と共に道場で鍛錬したりと、僅かに残っている記憶を思い出しながら水やりを終わらせて玄関へ赴き、ブーツを履いて外に出る。

鳥の囀りが辺りに響き渡る静謐な朝。漣の様な静けさと綺麗な景色は9年という月日が流れてもあいも変わらずいつも通りだった。その上まだ早い時間帯なのであまり歩いている人は殆どいなかった。朝日を目一杯浴びて、深呼吸で朝の新鮮な空気を肺の中に入れてから織はマンションから出てランニングを始める。

走るコースは特に決めてはおらず、大抵はその日の気分によってだいたい決まっている。30分以上休むことなく走り続けて、近くの公園で懸垂や腕立てなどの一通りのトレーニングをこなしてからマンションに戻る。

着ていた鍛錬用の道着を洗濯機の中に放り込み、鍛錬で流した汗をシャワーで流して身体を綺麗さっぱりにした後、浅葱色の着物に着替えてキッチンへと向かう。

冷蔵庫の中を覗き、朝の献立を決めてから必要な食材を取り出していく。

慣れた手つきで朝食の調理をしているとリビングのドアが開き、ゴスロリチックなドレスを着た少女が織の視界に入ってきた。

「おはよう、織」

「おはよう那月義姉。朝食まだだから新聞読んで待つてくれ」

「ああ、分かった」

とイスに座って新聞を開いて読みはじめる。

彼女の名前は南宮那月^{みなみやなつき}。年齢（自称）26歳であるが、見た目は十代前半でも通用する。下手をすれば小学低学年と見間違われかねないくらいに若い、というより、見た目が幼い。顔の輪郭も体つきもとにかく小柄で、年中常夏であるこの島であろうと常にゴシックのドレスを着ている（本人曰く、夏の有明に比べればどうとでもないらしい）為、黙っていれば人形とまちがえてしまいそうな容姿である。

だが彼女は空隙の魔女^{くうげきのまじよ}という異名を持つ高度な空間制御の魔術を得意とする国家攻魔官であり、織が通っている彩海学園で英語担当の教師をしている。

因みに、先日の獣人を追跡している最中に使った鎖の召喚や屋上まで飛んだ空間転移も那月から教わったものだ。とそんなことを思っているといつの間にか朝食の準備が終わっていた。

出来た料理をキッチンから運び出し、机の上に並べていく。並べ終えた織は那月の対面に座り、那月も読んでいた新聞を畳んだ。

「いただきます」

両手を合わせてから恒例の挨拶を済ませて2人は静かに朝食を食べ始めた。カチャカチャと箸を動かす音だけがリビングに響く。那月と織は基本食事中は喋ることはないので自然に静かになる。それ以前に、マンションの最上階を丸々使っているのに2人しかいないのも色々と突っ込みたい所であるが。そんな時、点けていたテレビから流れるニュースから気になる情報が耳に入ってきた。

『続いているニュースです。ここ2カ月、魔族ばかりを狙った襲撃事件が多発しており…』
織は一旦箸を置いて那月に質問した。

「これで6件目か。まだ進展がないのか、那月義姉?」

「ああ。昨日の獣人共といい、この襲撃事件といい、次から次へと厄介事が増えてばかりだよ」

「やっぱり俺も動いた方がいいんじゃないか?」

「お前に頼んだ仕事は昨日でひとまず終わりだ。攻魔師見習いの上に一学生であるお

前は普通に過ごしている。学生としての本分を忘れるな、織。だが、万が一被害が

止まらなくなった時はお前にも動いてもらうぞ」

「りょーかい」

そんな会話を挟みながらも2人は朝食を済ませて、織は朝食で使った食器をキッチンに持っていて洗い始め、那月は教師としての仕事があるので、学校に行く準備をして一足早く家を出て行つた。

食器を洗い終わらせた織は、特に何もやることがなかつたので自身の日課である島の散歩をすることにした。いつも通り赤い革ジャンを袖に通し、ブーツを履いて家を出た。

家を出た織は、モノレールに乗って移動して学園付近にある駅で降りると、学校の裏手にある丘の上の緑の木々に覆われた小さな公園の奥にある、現在は廃墟と化している修道院へと足を運んだ。

もう何度も訪れた事があるので特に驚くこともなく、時の流れによつて傷んだ木製の扉を開けて中へ入ると、其処には、燃えるような赤い毛並みを持ち、肩や脚にイレズミが入った獣——織の使い魔のナナキが、崩れ落ちた瓦礫の陰で無数の猫達とじゃれ合つ

ていた。

「よう、ナナキ。元気そうだなによりだ」

「漸く来てくれたかー織。夏音はほぼ毎日来てくれたし猫たちがいたから何とかなっ

てたけど、やっぱり織がいないとオイラ寂しかったぞー」

「悪い悪い。最近夜中に騒ぎ立ててる連中が多くて其奴らをひっ捕まえるのに忙し

かったんだよ。まあ昨日で一通り終わったからこうしてのんびりこれだからな。

で、怪我の具合はどうなんだ？」

「だいぶ良くなってきたぞ。でも戦えるまではまだ調子は戻ってはいないけど」

自分の使い魔兼相棒のが良くなっているのを知って織は安堵した。ナナキと使い

魔契約をしてからかれこれ5年、これはこれで色々あったが、革ジャンの件と同様、長

くなる上にメンドクさい為、此処で思い返すのはやめておく。後、何故ナナキがマン

ションではなくこの修道院で過ごしているのかは、マンションがペット厳禁なのと、室

内より外の方が良いとナナキ自身がリクエストした為だ。ここに来て一緒に猫達の

世話をしている同級生の少女からもちゃんと許可を貰っている。ナナキを連れて来

た時に、早速猫達の遊び相手になってくれたので即OKが貰えた。

「……そうか。あれから3か月、あの時起こった事の顛末を一から最後まで知ってる

のは俺とお前だけ……か」

「織……」

そう呟いた後に織は表情を暗くし、それに続いてナナキも暗い表情を浮かべる。

『織！何を暗い顔をしている！汝にそんな表情は似合わぬぞ!!?』

ふとそんな声が聞こえた気がした。我に返った織はナナキが暗い顔をしていることに気づき、直ぐにいつも通り（らしい）愛想がないムスツとした表情に戻す。

「いつまでもあの時のことを蒸し返すのはもうやめだ。暗い顔してんのをあの寂しがり屋の金髪ビビリチビに知られちまったら絶対笑われちまう。そいつだけは何があっても御免だ。悪かったなナナキ」

天井が崩れ落ちて露わになっている雲ひとつない澄み切った青空を見上げながらナナキに謝罪する。

「ううん、織いつも通りに戻って良かった。あ、そうだ！織が来たら頼む事があったんだ！また脆い所が増えたから直すのお願いしていいか？」

「ああ、それくらいなら朝飯前だ」

と織は瓦礫の陰に鎮座してあった一式揃っている工具箱を持ち上げる。元々は家から持ち運んでいたが面倒だったのでここに置いていつていた。どうせこの廃墟に自ら足を踏み入れる者はいないし、ナナキが見ていてくれるというのもあったからだ。

「さて、早速作業開始するか。ナナキ、何処を直せば良いんだ？」

「えっとね、まずは……」

修繕を始めてから数時間。ここ最近訪れていなかった為、直す箇所が多くあつて思つた以上に時間がかかった。

「ふう。漸く終わったか」

「お疲れ様、織。直してくれてありがとうとなく」

両手を上にあげて伸びをしながら織は細長い椅子に座つた。一仕事終わったからなのか、鳴りを潜めていたはずの眠気が今になって襲つて来た。

「やべ…眠くなつてきた。最近寝るの遅かつたからそのせいかな。ナナキ、ちよつと俺寝るわ」

「いいよ。何かあつたら起こすからお休み〜」

「ん。お休み…」

織は椅子の上に横になつて目を閉じる。かなり眠かつた所為なのか、織の意識はすぐに夢の中へと落ちて行つた……。

穏やかなひと時

織が寝始めて数時間。修道院へ向かって歩いている2人の少女がいた。1人はバスケットを持っていて黒髪のポニーテールの少女、もう1人はビニール袋を持っている銀髪の少女だった。

和気藹々と楽しそうに話しながら2人が修道院へ入った先に映った光景は、椅子の上で横になっている織と、その下で猫達と一緒に丸まって寝ているナナキだった。

『ねえじいちゃん』

これは……夢……か？

『ん？ なんじゃ織』

あ、爺ちゃんがいる……

『命ってなんなの？』

てことは俺がまだだ????織だった時の記憶なのか……

『……お主随分と難しい質問をしてくるのぉ』

あの時、何でこんな質問したんだっけ？

『おじいちゃんでもわからないの？』

えっと……確か……

『わからんわけではないが……それが正しい答えかどうかは知らぬ。それでもいいかの？』

ああ、そうだ……

『聞きたい！』

身体が弱かった俺は、????織生きながら死に近かった……だから……

『……分かった。命とはの……』

命って一体何のためにあるのか、俺より長く生きてる爺ちゃんから聞いて知りたかったんだっけ……

「ん……」

ヒドく懐かしい夢を見た。 どうも今日は ????織の時の記憶を思い出す事が多いみた

いだ。いつもは霧に覆われてるかのよう思い出しにくい上に殆どはもう自分の頭の中には遺つて居ない筈なのに。

閉じていた瞼を開けると目の前に映つた光景は崩れ落ちた天井から見える青空では無く、見覚えある2人の少女の顔だった。鼻に息がかかるくらいの至近距離で、同級生の暁風沙と叶瀬夏音が織の寝顔を覗き込んでいた。

「……………」

「……………」

顔を赤く染めながら無言で固まっている2人から離れて、横にしていた体を起こして軽く伸びをしてから、先程まで体を横にしていた椅子から立ち上がつて織は2人の前に立った。それと同時に丸まつて寝ていたナナキも目を覚まし、周囲にいる猫達の眠りを邪魔しないように身体を起こして織達へ近づいた。

「ふああああ……おはよー織。よく眠れた？」

「まあそれなりにはな。つてかお前も寝てたのかよ」

「だつてこんなにいい天気だよ。仕方ないじゃ〜ん」

マイペースな己の使い魔の弁明に溜息を吐きながら、未だに固まっている2人に話しかけた。

「よう風沙、夏音……つて何で2人共顔赤くしてんだ？」

「ななな何でもないよ！　ねえ夏音ちゃん！」

「は、はい……何もありませんでした」

「……なら良いんだけどよ」

どう考えても何かあったとしか思えない露骨な反応だったが、余り深く聞かない様にした。

「そういや此処で俺たちが揃うのは久しぶりだな。いつ以来だ？」

「夏休み入ってから全然揃ってないよ。　織は仕事、凧沙は部活で忙しかったし、オイラも怪我治すためにずっと休んでたから。　ここに来てくれたのは夏音だけだったよ」

「そうだったのか……猫達の世話あんのに内の大飯食らいの使い魔の面倒まで見てくれて悪いな夏音」

「いえ、私もナナキ君と過ごすのは楽しかったのです」

と嬉しそうに夏音は織に返事をする。　だが、いつの間にか凧沙にモフられてたナナキが不機嫌そうな顔をしながら織の方に向けた。

「ちよつと織ー、大飯食らいってオイラの事？」

「他に誰がいるんだボケ。　那月義姉が決めた食費をオーバーしまくって俺のポケットマネーまで全滅寸前に追い込みやがっただろ！　お陰で限定の茶菓子と小説が買えなかった上に那月義姉からペランダ干しの刑まで食らったんだよ!!？」

「だつてご飯少なくてお腹空いたんだよ」

「だつてじゃねえよ！ 我慢することを覚える！ 何年俺の使い魔やつてんだよ!!？」

「五年だよ。あれからもうそんなに経ったんだね〜」

「五年も過ごしてんだから少しは察しろよ！ 大体お前は……」

「なにさ、そう言う織だつて……」

些細な一言により痴話喧嘩をはじめた主従達を見ていた風沙達から笑いが出た。

「なんだよ2人共、急に笑い出して……」

「ごめんね、急に笑っちゃつて……ただ、久しぶりにしー君の元気な姿を見れたから嬉しくてつい……」

「え……」

「春辺りから夏休み入るまで織君元気なかつたでした」

「風沙達心配してたんだよ」

「あーその……悪かつた。あの時ちよつと色々あつてな」

あの時のことを思い出したせいか、左手から痛みが走ってくるような感覚に襲われた。2人に気づかれないうよう右手で左手を思わず抑えながら織は返答する。

「ううん、元気なら全然いいよ！ あつそうだ、ねえしー君、この後つて何か予定ある？」

「いや、特に何も無いけど……」

「じゃあさ……」

凧沙は足元に置いていたバスケットを持ち上げて織に見せながら

「丁度お昼だし、サンドイッチ作ったから一緒に食べない？」

夏音が持ってきた袋にある猫缶を開けて猫達に餌をあげ終わった3人は木陰辺りにシートを敷いて腰を下ろし、凧沙が作ってきたサンドイッチを食べることになった。

因みにナナキは猫缶と一緒に夏音が持ってきた骨つき肉にガブリついている。

「ナナキ君と猫達にご飯あげ終わったし、凧沙達も食べよっか」

凧沙の手によりバスケットを開かれ、色とりどりのサンドイッチ達が姿を見せた。

「うわあ……」

「ん、美味しそうだな」

「でしょ！ 今日調子良かったから張り切りすぎて沢山作ってきちゃったんだ！ 凧沙

と夏音ちゃんまで食べられるか不安だったけど、しー君がいてくれて良かった！ それ

じゃ……」

「「いただきます」」

3人は互いにサンドイッチを手に取って食べ始めた。

「どう、2人共。味は大丈夫？」

「美味しいです」

「少し辛味が効いてるが美味いぜ、これ」

サンドイッチの味が大丈夫なのか聞いてきた風沙に織と夏音は正直な感想を返し、さらにサンドイッチを口にもっていく。

「良かった。朝早く起きて作った甲斐があったよー」

風沙は嬉しそうに笑った。

ここ最近夜中で動くことが多かった所為か、サンドイッチを嬉しそうに食べる夏音、綺麗な笑顔を見せる風沙の姿が織にはとても眩しく見えた。見渡す限り一面の青空と、葉と枝が生い茂っている木の下で昼食が取れるだけでも十分平和すぎるのに、そこに彼女たちまで加わったら、キャパシティなんて簡単にオーバーロードしてしまいそうだ。これ以上見ていたら自分の何かがまずいことになりそうだと感じた織はバスケットから追加のサンドイッチをとり、再び口の中へ運び始めた。

前々から気づいていたが、どうも自分はモノの死は直視できても二人の少女を直視できない時があるようだ。

そして直視という単語に連想して一つ思い出した。そういえばこの場にいない義理の姉も同様にたまに直視できない時もあったなど。一体何故なのか、この時の織はまだ理解できていなかった……。

「ごちそうさまでしたつと」

「ふう。美味しかった〜」

「はい……沢山食べたでした」

昼食を済ませた3人はシートの上で川の字の様に寝っ転がっていた。先程も思ったが夏休み終わりの間近にしては穏やかな天気だ。つまり……

「(やべ……また眠くなってきた……)」

睡魔が襲ってくるということだ。気付いた時にはもう意識が朦朧としてきており寝る寸前だった。なんとか眠気と必死に格闘している織の左右から暖かい感触がした。一体何なのか見てみた。その正体は織の腕に抱きついて眠っている風沙と夏音だった。

本格的にマズイと感じた織は何とかして2人を離そうとするが中々外れない。もう少し力を入れればどうにかかなりそうだがそれでは起こしてしまう。ならばどうし

ようかと考えていたが、2人の方へ意識を向けてしまったせいで、もう織には眠気に対抗する力は抜けていた。

まあ、偶にはこんな日もいいか……

そんなことを脳裏で呟きながら、織は2人の温もりを感じながら意識を手放し、再び眠りについた……。

だが、この穏やかな1日がある意味、この面子で過ごす最後の休息だとこの時の織は知る由もなかった……

最後の日常

結局睡魔に負け、織は夕方まで2人とグツスリ眠っていた。あれ程時間が短く感じたのはいつ以来だろうか。少なくとも春から休みに入るまではなかったのは確実だ。

だがらと言って殆ど何もせず食べて寝ていただけというのめどうかと思うが、ここ最近忙しかった為に一日中ゆっくり休めた日はあまりなかったのでそういう意味で考えると今日は貴重な日だったと思いなから、織はスーパーで夕飯の買い出しをしていた。

起きた後、風沙はそのまま家に帰り、夏音はもう少し修道院に居る事になった。

真つ直ぐマンションに帰宅した風沙はともかく、夏音については、万が一の事を考えてナナキに使い魔のパスを通じて知らせるように言っておいたので、安心して買い物をする事が出来た。

今日は肉が安かったので夕飯はハンバーグにしようかと肉が置いてある棚に向かいながら、明日は何をしようか考えていた。今日は散歩する予定のつもりが昼寝で潰れてしまったので、明日は島を一周でもしようかなと予定を立てていた矢先、ポケットの中に突っ込んであったスマホが着信音を鳴らしながらブルブルと振動する。

どことなく嫌な予感を感じながら織は渋々電話をとった。

「はいもしもし、こちら南宮……」

『漸く出やがった！ 織、明日暇だよな、な!!?』

まるで怒っているのかと思わせるほどの大声が、電話越しから織の耳を貫いた。キーンと鳴る音が耳から消えるのを待ってから織は電話相手に返事を返した。

「んな大声出さなくてもちゃんと聞こえてるからトーン下げて落ち着いて話せ大輔。俺の鼓膜破る気か」

『わ、悪い悪い。改めて聞くけどよ、お前明日暇か?』

織の一声で漸く落ち着いたのか、電話相手はゆっくりとした口調で聞いてきた。

「まあ、昨日でもう那月義姉の手伝いは終わったから特に予定は無いけど……どうしたんだ?」

『頼む! 課題終わらせんの手伝ってくれ!』

「……………は?」

また信じられない頼みが耳に入り込んで来た。

「……………ちよつとまで。お前もう夏休みの課題終わったんじゃないやなかったのか?」

織の記憶が正しければ、課題の大半は夏休み序盤に面倒なものを一緒に終わらせて、後は毎日コツコツやれば終わる様に計画までちゃんと作った。ついこの間、終わったぜー! と、ムカつくぐらい嬉しそうに連絡して来た筈なのだが……

『実はよ……休みの終わり近えから部屋の片付けしてたら、奥からプリントの束が……』
「何の課題だ？」

『……………休み前のテストの補習課題』

「ああ、成る程。大体理解した」

そういえば此奴、休み前のテストの8割を赤く染めてしまい、それで夏休みの課題とは別に追加の課題が出されていたな、と。あの時終わらせたのは夏休みの課題であつて、追加の課題は入っていなかった。恐らくは、夏休みの宿題が終わった喜びと達成感で追加の課題の事を今日まですっかり忘れていたつてところだろう。本音を言えばお断りしたい。せつかく明日の予定を決めたところなのに、ここでプランをオシヤカにされたくはない……が、それで付き合ひの長い親友を見捨てるのはあまりにも忍びない。

「……………はあ。わかった、手伝つてやるよ」

『本当か！』

ただし、予定を潰してくれた代償は払ってもらおう。

「ただし、条件付きでだ。一つ目、やる場所は『逆月』。二つ目、昼飯は『逆月』でお前の奢り。この二つの条件を飲むんならな」

『おいおいおい！ 逆月で昼飯だあ!? 飲み物は兎も角、料理の値段やばいつてのに

……』

「別に無理なら構わないぜ。その代わり明日はお前一人で何とかしないとイケねえがな」

向こうは暫し唸りながら考え、

『だ——！ 分かったよ！ 奢るから手伝つてくれ!!?』

「交渉成立だな。で、明日何時に集まる?」

『9時に集まろうぜ!』

「了解、9時に逆月だな。言い出しつべなんだから遅れんなよ」

『おう！ じゃあ明日は宜しく頼むぜ織!!?』

元気よく啖呵をきりながら通話を終了した。

武藤大輔。小学生の時に知り合った織の男友達の1人であり、同じクラスと同級生である。周りからは人情厚い馬鹿一直線の男と認識されている。

それは兎も角、こうして何の予定もなかった自由な夏休みの一日に別れを告げ、友人の宿題を手伝うこととなった。再度溜め息を吐きながら織は夕飯の材料の肉を取りに棚の方に向かって歩いていった。

翌日、いつも通り体を動かし朝御飯を済ませてから、朝から雲ひとつない快晴で、ギリギリと輝く暑い日差しの中、目的地へ向かつて織は歩いていった。

喫茶店『逆月』。この辺りではそれなりに名が通っている喫茶店であり、彩海学園の生徒たちもよく足を運んでいる。最近だと数ヶ月後に行われる波瀾院フェスタで、何処そのメイド喫茶とコラボ企画を考えると何かとかという噂が耳に入ってきたが。

「いらつしやいませー……ってあら、少年じゃない」

「どうもユキノ。此処に来るのは2ヶ月ぶりか？」

カウンターの向かい側に居た女性——ユキノに挨拶する。表向きは逆月の店長だが、裏では情報屋を営んでいる。那月義姉に此処に連れてこられた時に紹介され知り合った。

「少年が春の一件の後に来て以来だからあつてるわね。その様子だとそれ関連については心の整理が出来たみたいね」

「まあな……で今日は此処でダチと待ち合わせしてるんだが……って居た居た、そんなじゃ後で注文頼むわー」

「ごゆっくりどうぞ少年」

目的の人物を見つけた織はユキノとの会話を切り上げて大輔の所に向かう。

「おお！ 来てくれたか織！ 待ってたぜ!!？」

「そつちも遅れずに来てたみたいだな。 そんじやあさつさと終わらせようぜ」

運命の邂逅までもう間も無くとは知らぬまま、織は大輔の課題の手伝いをした。

数時間後、これが夏休み終わりの……否、何の問題なく友人とすごせる最後の日常になる……。

遭遇

あれから昼食を兼ねた休憩を取りながら課題を取り組んで数時間かけて、なんとか終わらせることが出来た。

「よっしやああ！ 終わったぜー!!?」

大輔の叫びを聞いた織は持参していた小説に葉を挟んで閉じ、大輔の方へ視線を向ける。本音を言ってしまうと、終わるまでもう少し時間がかかると踏んでいたが如何やら自分が思っていた以上に大輔の学力は上がっていたみたいだ。

「お疲れさん。これで課題はもうないか？」

「ああ、今度こそバツチリ終わったぜ！ 付き合ってくれてありがとな織!!?」

「今更だろ。……そーいや最近力の方は大丈夫か？」

「ああ、あの日以来ちやんと制御出来てつから大丈夫だぜ」

唐突だが、大輔は過適応能力者ハイパーアダプター——いわゆる超能力者みたいなものである。とはいえ、本土からこの島に来たばかりの頃は能力自体が強力過ぎて制御ができずかなり荒れていたが、とある事故を起こして織が巻き込まれたのをキツカケに、こうして今日ま

で長い付き合いになつてゐる。

「今日はマジで助かつたわ！ 本当にありがとな!!？」

「そんな何度も言わなくてもいい……。次はこうならないようしとけよ」

「おう！ そんなじゃ、俺この後用事あつから行くわ。また学校でな!!？」

そう言つて大輔はご機嫌に逆月から出て行つた（お茶と昼のお代はちゃんと支払い済みである）。

そんな大輔を見送り、ジャケットの裏ポケットに持つてきた小説をしまうと織も店から出て行こうとした。その時、

「ちよつとストツプ少年」

ユキノに呼び止められ、織は振り返る。

「なんだよユキノ、言つとくが店の手伝いやら仕事やらする気は……」

「そんなつもりはないわよ。 今日の手伝いは間に合つてるし、仕事はあの4人組に任せてるし」

ユキノの言葉を聞いて、織は改めて店内を見渡しながら言う。

「なるほどな。だからおっさん達の姿が見えないのか」

「そういうこと。 呼び止めたのはさつき入つてきた情報を伝えておこうと思つてね」

「情報？」

「そうよ、今日この島にちよつとした新参者が来てるわ」

「新参者？　どんな奴だよ」

「那月の商売敵って言えばわかるでしょ？」

その一言で織の纏う気配が一気に変わった。

「……それは確かなのか？」

「ええ、さつき届いたばかりの新鮮な情報よ。　保証するわ」

「……ここに来た目的は分かるか？」

「……考えられるとしたら、例の坊やの監視、又は抹殺って所かしらね？　まだ外を出歩くのなら気をつけなさい。少年はあの機関からは危険人物として目をつけられてるんだから」

「……情報提供ども。　だが、一体どんな風の吹き回しだ？」

「あら、それはどういう事かしら？」

何処か惚けているような喋りをするユキノに織は理由を述べる。

「あんたが対価を要求せず、無償で情報教えてくれるなんてあり得ない。　何企んでんだ？」

「人聞きの悪い事言うわね。そんな警戒しなくてもいいわよ、久々にウチの常連さんが来てくれたからそのサービスよ」

「……分かった、そうゆう事にしとく。遭遇しないよう散歩は早めに切り上げておく。じゃあなユキノ、また来る」

織はそう言つて、今度こそ『逆月』から出て行つた。

誰もいなくなつた店内で、ユキノはポツリと呟く。

「そんな事言つて、坊やの事が心配なのは見え見えよ。相変わらず素直じゃないわ

ねえ……まあ那月が育てたから当然か……。あれじゃあ周りも色々と苦労するわね

……」

『逆月』から出た後、織はファミレスがある方へ足を運んでいた。目的は勿論、ユキノが言つていた人物を捜すためである。ここ最近ファミレスで同級生の友人と、溜まつてしまつてゐる夏休みの宿題を処理していると、この間先輩達と話している時に聞いていたのでまずはそこから当たる事にした。

トラブルに慣れてる自分なら兎も角、彼女から受け継いでしまつた力を制御出来てい

ない素人で危なっかしいあの先輩を今一人にするのは危険すぎる。とは言え幾らあの機関の人間でも、流石に白昼堂々と標的を手にかけるような暴挙には出ないとは思いますが、世の中何が起るかわからないので、警戒は怠らないようにする。いつ面倒ごとに巻き込まれてもすぐ対応出来るように、常時持ち歩いているナイフを袖の裏に忍ばせてあるのを確認してすぐに取り出せるようにし、念の為相手の拘束や足止めなどが出来るように鎖を召喚するための魔術も事前にスタンバイしておく。一旦立ち止まって武装とコンデイションなどを確認し終えた織は再び足を動かす。

街中から離れて海沿いの道を歩いている為、潮風の匂いと音が聞こえていて気持ちが良い。島に訪れた時は、この世界に来る前の環境が田舎だったせいかあまり馴染めなかったが、今ではすっかり慣れてしまった。普段ならもう少し楽しみながら歩いているのに、今はやるべき事があるせいでそれが出来なくて残念だと思いながら織は歩き続ける。

散歩に関してはこちらに来てから出来た趣味だ。

この眼で視ている色のある世界は自身にとつては錯覚に過ぎないと感じ、いつみてもツギハギだらけで、今でも崩れてしまいそうな伽藍堂の世界こそが織の本当の世界。ジツとしていると足元が崩れて奈落の底に落ちてしまいそうな予感がして、それが怖くて用事がない時には大抵は散歩をするようになった。要するに直死の魔眼で視た

世界に恐怖を感じたのがキツカケで散歩という趣味が生まれたということである。

ともかく今は自分の事よりも先輩の方が優先だ。歩きから走りに変えて、フアミレス近くに着いた時、この炎天下の中でパーカーを羽織り、フードを被っている人物が視界に入ってきた。島でそんな格好をしているのは恐らく一人しかいない。

「よお先輩」

「うお!? つて織か……脅かすなよ……」

暁古城。 彩海学園高等部一年の織の先輩であり、都市伝説の類いだと言われ、存在しない筈だったもう一人の真祖——第四真祖 焰光カレイドブラッドの夜伯 の力を受け継いでしまった元人間で現在未登録の魔族である。

「悪い悪い、その様子だとまだ接触してないみたいだな」

「接触? どういう事だ?」

「それはな……ちっ、一足遅かったか」

既に何者かが自分達を見ている。さりげなく周囲を見回すと簡単に見つけられた。待ち構えているような姿勢でこちらの様子を窺っている一人の彩海学園の制服を着た少女の姿を。襟元がりボンで結ばれている為、自分と同じ中等部だろう。だが、あの少女の顔には見覚えはないし、何より、ベースギターのギグケースなんてものを見慣れない人が持ち歩くのを目撃したら、すぐ学園で目立ち、噂になっている筈だ。そして、

制服を着慣れてないのか、体の動きが若干戸惑っているような節も感じる。

間違いない。あの少女が恐らくユキノが言っていた新参者だろう。

「先輩、向こう見てみる」

「向こうに何かあるんだよ」

「良いから早く！ 気づかれない様にさりげなく見ろよ」

織の言葉に渋々従い、言われた方へ視線を向けて、少女の姿を捉えた。少女の存在を確認した古城は気づかれなないように視線をずらしてから織に話しかける。

「なんだあいつ？ 見たことない顔なんだが……織、お前の知り合いか？」

「あんな奴知らねえよ。あんな目立つモン背負ってたら噂になるだろ？ 先輩も知ら

ないって事は、こいつは確定だな」

「確定ってなんの話だよ？」

「場所変えてから説明する。こつちだ、先輩」

「おいちよつと待て織！」

古城の手を掴み、移動する織。掴まれてる古城は何か言っているが、今はそれに耳

を傾けている暇はない。

まずは視界に入ったショッピングモールに向かう。散歩している時にゲームセン

ターをみつけたのを覚えていたので、一旦そこに入って、少女の様子を窺うことにする。

店の中に入れば、何かしらのアクションを取る筈だ。自分達が動き始めたのをキツカケに、後ろから少女がついてくる気配を感じた。それを確認した織はそのまま古城と共にショッピングモールの中へと入って行った……。

真祖と剣巫と殺■鬼

シヨッピングモールに入り口近くにあったゲームセンターに入った織と古城は、周りに怪しまれないように近くに居た巨人と怪獣のカードでプレイするアーケードゲームの二人プレイモードで共に遊ぶことにした。織は胸にZと付いた巨人と、その師匠で良い声をしてる青と赤の巨人、古城は赤と紫の巨人と、胸にXが付いたメカニカルな容姿をしている巨人の組み合わせとなった。(なお、使っているカードは織が持参したものである)

バトル相手はとある機体をベースにした、様々な怪獣の一部を体のあちこちに生やしている、歪かつ禍々しい姿をした怪獣を相手にしながら、チラリと横目で自分たちを尾行している少女の様子を伺った。店内に入って遊び始めてからずっと、彼女は未だに入り口付近でうろついていた。

「まだいるみたいだな……踏み込んでくるかと思っただが……」

「てかなんであの子、ここまで俺たちを尾けてくるんだよ」

「正確に言うなら、俺たちじゃなくて古城先輩を尾けて来てるんだよ」

「はあ!?」

織の言葉に驚いた古城は、目にも止まらぬ速さで首を動かし、織の方へ顔を向けて大声をあげた。

「先輩大声出しすぎ、あと余所見しないで手元のボタン早く連打しろ！ ガード成功しなきゃ死ぬ死ぬ!!」

「やっべ、うおおおお間に合ええええ!!」

話に取り残されて手元がお留守になったことでボタン押しが遅れたが、真祖になった影響で身体能力の飛躍的な向上していたため、尋常じゃない速さでボタンが連打されたことよってギリギリでガードは成功し、怪獣の攻撃を耐えられた。ガードが間に合ったことでホッと息をつきながら、改めて古城は織に話しかける。

「それにしても、なんで俺の後つけてくるんだよ?」

「ただの人間から真祖になるなんて前代未聞な事が起こった先輩に、周りが手を出さず放っておくと思うか?」

「そ、それは……」

ストリートに事実を後輩に叩きつけられた古城は再び少女の方へと視線を向ける。最初は、自分たちの姿を見失うのは避けたいが、店内に入ったらばったり顔を合わせてしまう可能性もあるのでどうすればいいのか迷っているように見えたが、それ以外にゲームセンターそのものをよくわからない得体の知れないものとして警戒しているよ

うにも見えた。途方に暮れて立ち尽くす少女を観察していた古城は、まるで自分たちが彼女にひどいことをしているような罪悪感に襲われ、いたたまれない気持ちになった。

「なあ、織……」

「みなまで言うな先輩。連中が送り込んできた監視役にしては甘いというか……念のため、人通りの多い場所の近くまで移動してすぐに逃げられるようにすればいいだろ。さすがに人目がつく場所で手を下して大事にしたくはないだろうしな……なんにせよ、今はこの一戦を終わらせようぜ先輩」

「そうだな。ん？　なんか急に戦闘BGMから変わってなんかの曲流れてきたぞ」

この後の方針を決めている時、アーケード台から流れてくるBGMからなにかの歌に代わっていたのに気づいた古城は、この曲がなんなのか織に尋ねた。

「この曲は俺が操作してる胸に乙つてついてる奴の主題歌なんだよ。この曲何度聞いてもいいな……本編も一話から最終回まで見どころ満載で最高だったし、30分とは思えないくらい出来が良かったからな。文句なしでおススメできる作品だから先輩もよかつたら見てみたらどうだ？　今なら動画サイトで全話配信されてるし、コメントも面白いのたくさんあるぞ。なんだったらこれ以外の作品も良いやつたくさんあるから紹介しよ……」

「わかった、わかったから！ 今度見てみるから一旦落ち着け!!」

主題歌について説明し始めたと思ったら、彼の中でスイッチが入ってしまったのか段々早口になり、自身の身内のマシンガントークのようになっていた。しかもそれでいてボタン押しของ タイミングは正確であるのもまた気味が悪かったので古城は落ち着かせようとした。そのおかげか、織もハッ！ と我に返った。

「あー、すまん先輩、つい語っちゃまってたな……」

「いやいや、別にいいって。にしてもお前特撮もの好きだったんだな。結構前から見たのか?」

「まあな……」

確かに好きではあるが、きっかけになった経緯を考えると織は内心複雑な気持ちになった。かつて■織であった頃、病室に備えられていたテレビでアニメと一緒によく見ていた、数少ない心の支えであった名残である。覚えているのが、見るのが好きだったという事実だけで、どの作品のなにか好きだったのかはもう思い出せなくなっていた。あくまで今ここにいるのは南宮織であって、もう自分は■織ではない。だが、■織の残骸を元に生まれたと思うと無性に胸の内がかき乱されてしまう。この世界に墜ちてから変わらぬこの思いと考えは、時が立てば受け入れてられると思っていたが、

むしろ時がたつたびに強くなつてきている。思考がまずい方向に行きかけていた織は古城に悟られないように話題を替えた。

「誰にだつて好きなもんはいくらでもあるだろ？ 先輩だとバスケだろ？」

「前はな。今の俺じやもうバスケどころか運動系は気軽にはできねえよ……」

「なら俺が相手するさ。それなら別に問題ないだろ。あとは逆月のおっさんたちとかも大丈夫じやねえかな。まあ今はユキノのおつかいで出払つてるから現状二人だけになつちまうがな」

「……まあ、気が向いたらな」

「よし言つたな、忘れんなよ先輩」

雑談をしながら、二人はラストアタックで必殺技ゲージをためるために再び超高速でボタンを連打して、四体の巨人の光線で怪獣を見事撃破した。ちなみに余談だが、ボタン入力の正確さと高速連打による影響でバトルの結果はぶつちぎりでも全国一位のスコアをたたき出して一時期ネットで騒がれることとなった。

そうして、先ほど決めた方針で動くために店から出た矢先だった。

わかいがすち
「若雷っ——!!」

件の少女が突き出した手で派手に染められた長髪にミスマッチなホスト風の黒スーツを着た20代前後の男を吹き飛ばして壁に叩きつけ、それを見て呆気にとられていた吹っ飛ばれた男の相方と古城が視界に入ってきた。

アーケードで使ったカードをポケットにしまい、ブーツの紐が少し緩んでいたので結びなおしている僅かな間でなんでこんなことになっているのかわからず、眼を酷使していないのに織の頭が酷く痛くなった。だが問題はそれだけではなく、二人の男が手首には金属製の腕輪——魔族登録証を付けられていることで登録魔族であることがわかってしまった。基本、腕輪を付けている魔族は人間に危害は加えない。理由は単純、そんなことをしてしまえば特区警備隊の攻魔官たちが駆けつけて来るからである。だが、

「てめえ、攻魔師だったのか!!」

我に戻ったもう一人のホスト風の男は逆上により、そのことは頭からすっ飛んでい

た。魔族特区であるこの絃神市では攻魔師の活動は嚴重な制限を設けているため、少し声をかけただけで手を出されるとは思いもよらなかつたが故に、おのが内に秘めていた本性が恐怖と怒りと共に表に現れた。口から牙を出し、真紅に染まった瞳と敵意を少女に向けて。

「D種——！」

本能と共に變化した魔族の男の身体的特徴を見て少女は顔を険しくしながらうめいた。欧州にて多く見られる、忘却の戦王を真祖とする血族。様々な血族に分かれた吸血鬼の中でも世間一般に浸透している吸血鬼のイメージに最も近い。常人を遥かに超える身体能力と魔力耐性、無限の負の生命力による高い再生能力をもつ。これだけでも厄介なのに、吸血鬼はさらにもう一つ、魔族の王として恐れられる所以の、強い切り札を持ち合わせていた。

「——灼蹄シヤクテイ！ このガキをやっちまえ！」

魔族の男の絶叫と共に左脚から何かが吹き出した。それは鮮血に酷似していたが血ではない。陽炎の如く揺らめきながら燃え盛る黒炎であった。

その炎はさらに燃え盛りながら形を作り出し、やがて炎の妖馬が生まれた。その瞬間、男が左腕にはめていた登録証が、攻撃的な魔力を感知して辺りにけたたましい警告音を響かした。それにより、シヨッピングモールやゲームセンターから来場客の避難を

促すためのサイレンも鳴り響いた。

眷獸。これこそが吸血鬼が魔族の王として君臨している理由である、自身の血の中に従えし魔の獣。

姿や能力は様々あるが、力が弱かったとしても最新鋭の戦闘ヘリや戦車は凌駕できるスペックを持つている。旧き世代であるならば、小さな村を丸ごと消し飛ばせると言われている。

若い世代であるこの男の眷獸にはそこまでの力は持ち合わせてはいない。だが、この灼熱の妖馬が辺りを軽く走り回るだけでもショッピングモールは壊滅させる被害は出せるであろう。しかし、宿主である男自身は眷獸を出すのに慣れていないせいか顔色が悪くしていた。

「こんな街中で眷獸を使うなんて——！
雪霞狼!!」

せつかろう

背負っていたギターケースから、少女はそれを抜き放った。

それは楽器ではなく一振りの銀の槍。瞬く間に槍の柄はスライドして長く伸び、内部に格納されていた主刃が穂先から展開され、続いて穂先の左右にも副刃が展開されて、槍は完全な形を成した。

素人の古城でも、よくできた武器であるのは見てわかるが、超高密度の魔力の塊である眷獸を止めるには通常はそれ以上の魔力をぶつける以外は方法はない。だからこそ

古城から見れば槍一本で立ち向かうのは無謀にしか見えなかった。

さすがにこの状況はまずいとわかつてはいるが、どう止めればいいのかわからず途方に暮れていた古城の肩にポンツと手を置かれた。後ろを振り返ればいつの間にか自分の後輩がすぐ後ろに立っていた。

「おい先輩、これ一体どういう状況だ?」

「あー、あの二人組があの子にちよつかいかけてナンパしてたらやりすぎたのか、あの子が切れて一人吹っ飛ばしたって感じ、だな……」

「おいおい、いくらなんでも攻魔師から手を出すかよ……あの機関の連中、人選どうなってるんだよ……」

尾行の下手さに加えてこの有様では、とても第四真祖の監視役とは思えない。が、今はそれよりもこの事態を収めるのが先決だ。

「この場合は俺が収めるから、先輩はじつとしてくれ。俺はともかく先輩は下手に動いちゃいけない。今はまだ特区警備隊はまだ来てないから大丈夫だけど、万が一の事もあ
る」

「……わかった。すまねえがまかせたぜ織」

「ああ、まかされた」

そうして織は古城の前に出て、一触即発の両者を止めるために前に向かって一歩踏み出した。

槍一本で自身に立ち向かう少女を見て、魔族の男は嘲笑した。得体の知れない力を使った攻撃で仲間を吹き飛ばした時は恐怖が湧いてしまったが、眷獣相手に太刀打ちできるといふ得物には見えなかったため、安堵しながら自分が勝つのを確信していた。

迫つて来てる一人の存在に気付かずに。

襲い掛かってくる妖馬に突き立てようと槍を構えた少女の頭上を一つの影が過ぎる。
影——織はそのまま眷獣へと向かい、

「寝てろ」

眷獸の頭部を片手で掴み、地面に叩きつけて押さえつけた。

「なっ!?!」

「お、俺の眷獸を素手で!?!」

槍を携えた少女と吸血鬼の男は目の前で起きた出来事に啞然とした。素手で眷獸を押さえつけられている光景を見てしまえばそうなるのは無理もない。

「攻魔師だ。おとなしくしてもらおうか」

織は、眷獸を押さえつけたまま魔族の男に攻魔師の証であるCカードを見せながらそう告げた。織の発言とカードを見て、男は急激に頭が冷えて冷静になって必死に言い訳をし始めた。

「ちよ、ちよつと待ってくれ!! 先に手を出してきたのはそのガキだぞ!! 取り締まるんならそいつからだろ!!」

「えっ!?!」

指を差しながら、自分に罪を擦り付けてきた男に、言われた少女は言い返そうとしたが、先ほどのことを思い返しみた。経緯はどうであれ先に攻撃を仕掛けたのが自分なのは確かな事実のため、顔を曇らせた。

「だとしても、街中で眷獸を使うのは違反だぞ。それに加えて攻魔師であるとはいえ、女

子学生に向けていいモンじゃねえだろうが」

「そ、それは……」

「とにかくまずはこの眷獣しまえ。いいな？」

「あ、ああ……戻れ、灼蹄」

そうして織に押さえつけられていた妖馬は主の命令に従って還っていった。それを見届けた織は、次に少女の方へと振り向いた。

「お前もその槍さつさとしまえ。こんなことのために使う物じゃねえだろうが」

「は、はい……すいません」

織の言葉を聞き、少女の方も頭が冷えて冷静になったのか、申し訳なさそうに謝罪した。

「まったく……まあ先輩から話聞いた限りだと殴られる原因作つたのこの二人みたいだな。これに懲りたならもうやるんじゃねえぞ。今回はまだ穏便な方だが、次やったら……どうなるかわかつてるよなあ？」

「は、はい!! 以後このようなことが起きないようにします!!!」

「よろしく」

再び男の方に向きながらスイッチを入れた眼で圧をかけながら釘をさし、魔族の男はそれに当てられて冷や汗をだらだら流しながら反省の意を示した。

それを見ていた古城は自身の担任教師であり、織の義姉の那月が何故か頭に過ぎつた。

「俺はこの二人を警備隊に引き渡しに行くから、先輩はその子と一緒に待つてろ。終わったらそいつを逆月に連れていく。そこなら誰かに話聞かれる心配ないからな。おまえも、ここまでやらかしたんだから、俺の言うこと聞いてくれるよな？」

「は、はい！ 本当に申し訳ありませんでした……」

「謝罪は一度だけで十分だ。じゃ、ちよつと待つてろよ」

織は男二人を連れて（気絶していた男は担いだ）一旦この場を立ち去った。

織が戻ってくるまでの間、静寂が漂い、気まずい空気になっているのをどうにかしたいと、古城は先ほどの件についてフォローしようとして少女が手を出した原因を見てしまったことについて口を滑らせてしまい、少女が激昂して再び槍を出そうとして軽いひと悶着あったのは余談である。